

日本玩具(おもちゃ)の歩み —手づくり玩具の出現から商品化まで—

The history of Japanese Toy
—Handmade toys from birth to production—

寺 島 明 子
Akiko TERASHIMA

【キーワード】 手づくり玩具(おもちゃ)の出現経緯 手づくり玩具(おもちゃ)の商品化
手づくり玩具の製作者(家族)

はじめに

子どもたちは、玩具(おもちゃ)や遊具に興味を持って遊び、その結果発達していく。そのことを幼稚園教育要領と保育所保育指針の保育内容では、玩具(おもちゃ)や遊具に興味をもってかかわり遊ぶ過程の中で、考えたり、試したりして工夫して遊ぶことを位置づけている。さらにそのことを自然に獲得できるように、幼稚園・保育園では、意図的に玩具(おもちゃ)と遊具のことが保育環境の一つの物的環境として設定されなければならないとされている。¹⁾

幼稚園や保育園の施設以外でも、子どもたちの置かれている環境を見てみると、たくさんの玩具(おもちゃ)で溢れていることに気づく。さらに、その玩具(おもちゃ)や遊具のほとんどは既成玩具(おもちゃ)である。なぜ既成玩具(おもちゃ)がこのように増えてしまったのであろうか。また、いつからこんなに既成玩具が出現したのであろうか。

子育てにとっていつの時代も玩具(おもちゃ)や遊具は必要なものであった。では、なぜ玩具(おもちゃ)や遊具を手づくりしなくても家庭では子育てができ、幼稚園・保育園では保育ができるようになったのか、手づくり玩具(おもちゃ)の出現と商品化までについて明らかにし、その原因を考えたい。

元来人間が子育てをしてきたときに、玩具(おもちゃ)は、子どもたちや大人たちにとってどのような役割を果たしてきたのであろうか。玩具(おもちゃ)というものは、大人たちが子どもたちに一方的に与えてきたものであろうか。J・ニューソン E・ニューソンは、子どもたちは自分の遊ぶエリアに玩具(おもちゃ)がないと、自らが遊びを作り出すことを挙げている。²⁾子どもたちは、玩具やおもちゃがないといたに遊ぶのである。しかし、子どもたちが発達していくのには、玩具(おもちゃ)や遊具があったほうがより発達していくことは明白である。

しかし、この時子どもたちに提供する物的環境の玩具(おもちゃ)や遊具については、手づくりでなくてはいけないとか、既成でなくてはいけないとは述べられていない。

また、幼稚園・保育園の保育者が子どもの遊ぶ玩具(おもちゃ)を手づくりし、提供しているところは少ない。なぜ少なくなってしまったのか保育者に聞き取りをしてみると、保育者自身が手づくりできない場合と、手づくり玩具や遊具を子どもたちに与えてみようという価値観がないことである。保育者は、玩具(おもちゃ)が手作りでなくとも既成でも子どもたちはよく遊ぶことを知っているのである。

デューイは、人間が手作りすることに興味のあることは、「学校と社会」の中で、子どもは自らが体を動かし、体験しながら創意工夫することが本能であると明確にしている。³⁾この考えからすると、保育者は子どもたちに自ら手づくりした玩具や遊具を提供していくことが重要であると言えよう。

1. おもちゃの語源の由来とおもちゃの登場理由

斉藤によれば、日本の「おもちゃ」という言葉の語源は、鎌倉時代に「手まもり」といわれていた。漢字にあてはめると「手守(てまもり)」「手玩(てがん)」であり、これは手でもてあそぶもののことを指している。この時代の藤原光俊による歌集「新撰六帖」には

道のへの芝生のつばなぬきためて
うなる子どものてまもりにせむ

と読まれている。道ばたに生えているチガヤグサを摘みためて、幼い子らのおもちゃにしようということで、古歌の中にそれが示されている。

「おもちゃ」という語源には、まりの意味もある。鎌倉時代より以前の平安時代の源氏物語の「若菜」の巻には、六条院で若い人たちの鞠(まり)遊びのことが描かれている。

大将の君は、丑寅の町に、人々あまたして、鞠もてあそばして見給ふと聞召して

と歌われているように、そのころすでに「もてあそぶ」ということばを、この古典女流文学作品の中

に見出すことができる。

この「もちあそび」あるいは「もてあそび」ということばが、現在の「おもちゃ」の語源になったと言えるであろう。

室町時代に入ると、この「もちあそび」に、宮廷あたりの女房ことばで接頭語の「お」が加えられ、上品な響きをもった「おもちあそび」ということばが生れた。今度はその語尾が脱落して「おもちあそび」が「おもちゃ」と変化していった。

つまり、こうして室町時代に貴婦人語として誕生したわけである。

江戸時代になるとおもちゃの名称は、「もちゃそび」と「手あそび」の二種類で呼ばれていた。両者ともこれらは、手に持って遊ぶものと言う意味である。おもちゃの呼び方は、「手に持って遊ぶもの」つまり「手持ち遊び」、それがつまり、「持ち遊び」となり、「もちゃそび」となった。⁴⁾

倉橋惣三は、孫かわいさに祖父母が手遊びの道具を「これ おもちゃ」といって与えたのが、おもちゃの言葉のもとであろうと推察している。⁵⁾

その後、おもちゃに対して、鎌田によれば、「もてあそぶもの」という意味の弄具(ろうぐ)、玩物(がんぶつ)、弄翫(ろうがん)などの言葉も用いたが、明治以後「玩具」に統一された。

また、この当時の「手遊び」は、「手作り」の物であった。童心を喜ばせようとおとなたちの手から、幼い者たちの手へそれらがすべて、「手作り」で与えられた「手遊び」であったという。

つまり、日本の江戸時代前期の子どもの遊ぶものは、大人の作った手作りのものを指し示しており、それは手で遊ぶことから、そのことを「手遊び」とも言っていたことになる。

おもちゃの登場のことを鎌田は、神様の祈祷のためのお供え物としての人形、不思議な霊力をもつものとして占いにもつかわれた独楽(こま)、また大人社会の生活道具の模倣物などのかたちで出現した、と述べている。それは、人類の文明や文化の発展に応じて、いろいろと発見、工夫され、それぞれの時代のおとなたちの知恵と愛情が、深くこめられてきたものである。

以上のように、おもちゃの語源由来は人間の歴史とともに変化してきたと考えられる。また、おもちゃの登場理由は、大人が子ども可愛さに手づくりし、与えたものであると言える。

2. 江戸時代におもちゃ売りが出現

鎌田は、江戸時代の庶民生活について以下のように述べている。「江戸時代は、人間的な知恵と愛情が、庶民社会のなかでもっとも深められ、発達した時代

ではないかと思う。都市や農村の経済が発達して、庶民生活にゆとりが生まれたことから、大人の世界では芝居や見せ物をみたり、書画を鑑賞したり、習い事をしたりして、余暇の活用に生きがいのみいだすことが多くなりました」。¹⁾その大人たちの生活の変化とともに、子どもたちの生活も変化した。子どもたちは、両親の仕事の手伝いや寺子屋で読み書きの勉強をし、子ども同士の遊びにも熱中していた。

また、以下のようにも述べている。「江戸時代には、子どもたちが楽しそうに遊ぶ姿を描いた絵画がたくさんあった」。²⁾その絵は、仲間と一緒に裸で川に入って魚取りをしたり、従来(道路)での水鉄砲遊びに夢中になっていたり、凧揚げを競ったり、力を合わせて雪転がしを楽しんだりしたものであった。子どもたちはこの光景から見ると、自然の中で伸び伸びと遊んでいたことが伺える。(絵図1)

さらに絵画の中には、「同じ年齢どうしだけでなく、大きい子どもと小さい子どもが、一緒になって遊んでいたことも描かれている」³⁾という。

おもちゃ売り屋に集まってくる子どもたちや、買ってもらったおもちゃが広まっていった背景には、子どもの無事な成長を願い、知恵と身体を発達を期待するおとなたちの思い入れもあったと言える。(絵図2・3)

つまり、江戸時代は大人たちの生活が安定し、子育てにゆとりが出はじめ、商品化したおもちゃ売りが出現してきたのである。「江戸時代には、全国各地の神社や寺院あるいは土俗的(どぞく)な信仰と結びついた縁起物のおもちゃ、また地域の特産物生産の技術や素材をいかした土産物のおもちゃなどがつくられている。井原西鶴(さいかく)の『日本永代蔵(えいたいらく)』などの作品には、子ども向けの風車や振り子人形をこしらえて、生計を立てている人々がいたことも描かれている」。⁴⁾

このような手づくりおもちゃは、店屋がなく制作者自身が街頭へでて売り歩き、商うしか方法はなかったのである。

この時代のおもちゃの素材は、竹、木、紙、土、糸など、日常生活のなかで得られる身近な素材が基本である。江戸時代以来の手づくりおもちゃは、そうした自然素材の特長をうまく引き出している。竹ならば、そのままのまるい管の形を利用したり、割ったり、曲げたりして、ばねとして使っている。

自然素材の肌触りや特長をいかしながら、それらを組み合わせ、さらにほんの少しの工夫やすぐれたアイデアを加えることで、江戸時代の人々はさまざまなからくりおもちゃを考案している。

たとえば、「目には見えない風の流れを虎や獅子の動きで見せてくれる『ずぼんぼ』(絵図4)、風の強

さを音で聞かせる『松風独楽(こま)』、手品のような不思議さを楽しませてくれる『変わり屏風』や『俵口橋』、同じ糸からでもまったく異なる動きを見せる『廻り鼠』と『管人形』と『からくり奴』、よれた糸のもどる力と松脂の粘着力を組み合わせ、奇抜なおもちゃとなった『飛んだりはねたり』、和紙の特性を生かしきった『御来迎』など、じつに変化にとんだお

もちゃがたくさんうまれている」。⁵⁾(絵図5・6)

したがって、江戸時代以来の手づくりおもちゃの素材は、竹、木、紙、土、糸など、日常生活などで得られる身近なものが基本であった。そうした自然素材の特長をうまく引き出して作り出し始めたのが、手づくりおもちゃの基本であると言えよう。

絵図 1



「すな鳥子供遊」

絵図 2

しめこのうさぎ売り
『風俗画報』一五四号より

絵図 3

おもちゃ売り
『風俗画報』一一〇号より

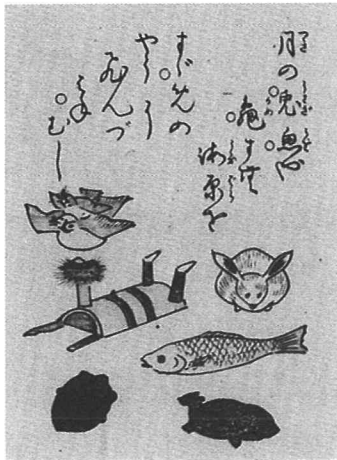
絵図 4



『うなゐの友』より

できあがり
ずぼんぼ

絵図 5



『江戸二色』より

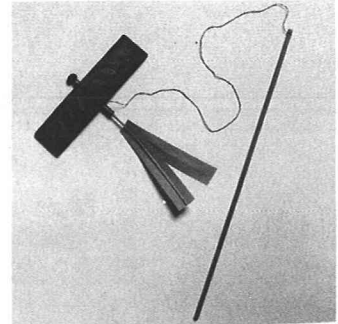
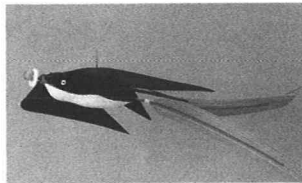
月の兎 魚や亀すむ
海原をすめぬように
飛んづはねむし
月には兎 海原には
魚や亀が住んでいる。
はねむし「とんだりはねたり」は、
すずめのように
空中に飛んでいる。

絵図 6



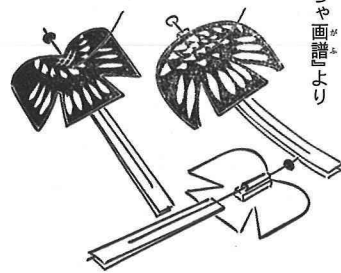
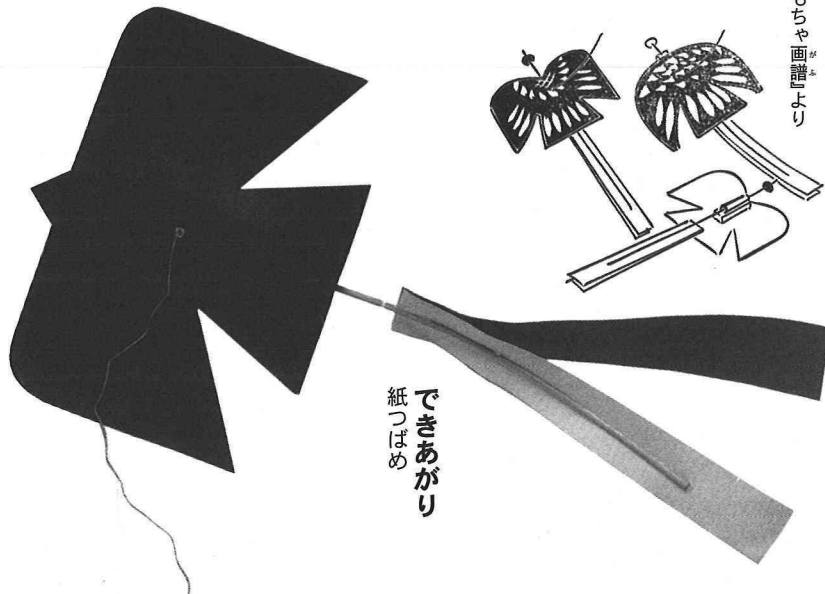
都鳥元り 『絵本家賀御伽』より

つけ木のつばめ「復元」



都鳥「復元」

『おもちゃ画譜』より

できあがり
紙つばめ

3. 手づくり玩具は父性の愛のめざめ

斉藤は、子どものおもちゃは「日本の郷土玩具」の中で郷土玩具の中の一つのものとして手づくりされ、自分たちの子どもの遊び相手を勤める「オモチャ」であることを意識して作り出されたものである、と述べている。そして、手づくり玩具、郷土玩具の中の一つのものとして祖父母から父母へ、次に子どもたちへと伝えてきたものである。

また、「子どもの世界に、おもちゃはなくてはならない遊び道具である。それが得られない場合には茶碗のふたや火鉢でも手当たり次第に利用する。子ど

もにとってこれもおもちゃなのかもしれないが、厳密な意味の『オモチャ』とは、おとながこどもの遊び道具として、最初から意識して作り与えたものでなければならない。⁶⁾

つまり、おもちゃはおとなが子どもの幸せを祈り、子どもの世界を理解するところにしか生まれてこないといえよう。

特に、「日本は過去のロシアとならんで、世界の二大郷土玩具王国とよばれているほど、その豊富な質を誇っている」⁷⁾という。作られた日本の郷土玩具のなかで、東北の素朴なこけし、九州の山間部、北山

田の荒削りなキジ車などをとりあげてみても、その祖型には、愛する子らにこれをおもちゃとして与えるため、父親が、丸木で作ったものである。また、遊びの乏しい農村の子どもたちのためには、ここでも父親がおもちゃを作ってやらねばならなかった。新潟の木ウシなどは、古くからこの地方で行われて来た闘牛遊びをまねて作られたものであった。

つまり、手づくり玩具は郷土玩具の中の一つとして、父が子どものために手づくりし、子どもたちに与えられてきたと考えられる。手づくり玩具は、郷土玩具として「父親から暮らしの片手間にあり合わせの材料で、子どもたちの遊び道具として作って与えられたところからこうして発足した」。⁸⁾

山奥の生活では、親の手でおもちゃを作ってやる以外に、童心を慰める方法はなかったのだろう。「そうした愛情のこもったところにこそ、何代も長い間の愛好にこたえられる、このような特色のある郷土玩具が生み出されてきたともいえる」。⁹⁾

4. 手づくり玩具は母性の愛のめざめ

玩具誕生の基になった父性愛にくらべると、「母親のおもちゃ作りは、質量的にも歴史的にも、ややおくれてやって来た」。¹⁰⁾子どもが玩具を母親から与えられるものとするのは、近代的な考えかたであった。玩具がおもちゃらしい形をやっと整えかけてきた過去の日本では、母親はまだ家庭生活の地位が低かったし、自由におもちゃを作り子どもに与えるほどの生活も技術も母親たちは、身に付けてはいなかったのではないだろうか。

母親の玩具作りの材料としては、布、紙などであるが、郷土玩具の布製のものがあまりにも少ないことに気づく。それは材料の布は当時の家庭にとって貴重品であり、それを自由に使う権限が母親にはなかったからである。紙も同様で、紙製「あねさま」が登場してくるのは、母親の家庭生活がようやく安定してきた江戸時代後期のことである。

現在も静岡の洞慶院の祭日に売られる「おかんじゃけ」なども、そのひとつの型を示している。これは若竹のさきを叩きつぶして麻糸のようにしたただけのものであるが、髪を結って「あねさまごっこ」遊びの郷土玩具の中の、子どものための手づくり玩具であるといえる。

したがって、手づく玩具は郷土玩具の中の一つとして、母親愛によって布、紙材料によって子どもに遊んで欲しいと願い、作り、与えてきた、と考えられる。

5. 手づくり玩具の起こり

では、手づくり玩具はいつごろから作られている

のだろうか。

「手づく玩具は、いつ、どこで、だれが、どんなおもちゃをまず創造したかははっきりしていない。平安王朝時代の文学には雛が登場してくるが、この時代の雛人形は上流貴族社会のためのものであって、自慰深い辺地郷土の人たちとは、まだ縁遠い存在であった。京都貴族のための雛や児童用の遊び道具は、それに隷属する工人たちによって製作させた。しかし、一般大衆は自分たちの手で「何か」を作り出さねばならなかった。しかも作って与える相手が身内であり、子どもたちを喜ばせてやりたい、という愛情が根本になっているだけに、そこに金銭的な目的はなかった。この時商品ではないアマチュア玩具が、名も知れぬ製作者たちの手によって生み出されたのである」。¹¹⁾それは、作り手の心の通った温かみのあるおもちゃの誕生だった。「キビやアワの葉を巻いて作ったテルテル坊主風な人形、ツバキの花輪飾り、海の貝殻、山の木の実—材料はいくらでもあり、簡単なものは子どもの手からも作られた」。¹²⁾その作り手はすべて子どもの親達であった。その後特に器用な人間によって代表的な玩具が生まれ、それが部落ごとに次第に統一され発展した。竹で作ったトリ笛の着想や草や木を材料にした風車、水車などの「動くオモチャ」の出現は、当時の子どもたちを狂喜させた。

子ども達を夢中にさせ、部落の人たちを感心させることで、一つひとつ効果を確かめながら、おもちゃ作りの技法も材料も、いくつかの時代を経てゆくうちに、だんだんと手のこんだ精巧なものへと進歩していった。集落ごとのそれぞれ特色のあるおもちゃが、郷土玩具の色彩をだんだんと示しはじめた。

しかし、この時、おもちゃは自分たち家族のうちわだけで作って楽しむもの、と言う考え方が依然としてこの人たちの心を支配していた。「武家政治の何百年、戦乱に追いまくられながら生きてゆかねばならなかった当時の人たちの間では、子どもらに手づくりのおもちゃを作り与えることが、明日へのせめてもの夢であり慰めであった。おとぎ話やおもちゃが、戦乱のなかから割合に数多く生まれることは、世界の文化史が物語っている」。¹³⁾

つまり、手づくり玩具は、京都貴族のための雛や児童用の遊び道具として、それに隷属する工人たちによって製作させた。しかし、一般大衆は、社会的に戦乱に追いまくられながら生きていた当時の人たちの間では、子どもらに手づくりおもちゃを作り与えることが、明日へのせめてもの夢であり慰めであった。つまり、一般大衆は、家族の中で子どものためのおもちゃを作り出さねばならなかったことが、手づくり玩具の起こりであると考えられる。

6. 手づくり玩具の商品化

齊藤の説によると「日本の郷土玩具」の中で、「子どもの遊び道具など、あり合わせの教材で自給自足的に作って与えるもの、うちの家族だけで楽しむもの、と長い間考えられてきたおもちゃにも大きな革命がやってきた」。¹⁴⁾それはおもちゃが、商品として扱われ市場で販売されるようになったことである。

江戸時代に入ると、「徳川政権の安定と貨幣の流通が近代の商業主義を導き、経済革命をもたらした」。

¹⁵⁾食糧、衣類、雑多な生活用品がどんどん生産され販売された。そして、このことはおもちゃの世界にも起こってきた。それを目当てに集まる人たちを相手に、おもちゃも商品として登場してきた。それをはじめは、主要な商品の添えものか、内職程度のものに過ぎなかったが、「城を中心にできあがった封建社会は、その地形状どうしても、よその土地から区切られた盆地に多くかたまっただけ、各藩単位に独自の盆地文化が成長し、そこから郷土色濃いおもちゃが生まれた。その土地の人たちにとって、こうしたおもちゃは、誰の胸にも、共通した『ふるさと』のシンボルを感じさせ、直感的に愛され親しまれた。盆地に生活する人たちの郷土愛にささえられて、おもちゃは商品として第一歩をしっかりと踏み出した」。¹⁶⁾

江戸時代は、金銭に対する観念が、現代から見ると、想像以上に高くあがめられていた時代である。子どもがその大切な金銭でおもちゃを買ってもらおうということは大変なことであった。そうすると、売る側にしても、すぐれた着想、もちのよさ、商品としてのおもちゃの向上に力を入れてきたと思う。買い手が多くなるにつれて、おもちゃは質量共にめざましく進歩した。商品として採算が取れるようになったので、大量生産的な土焼きのカマドが築かれ、張子の玩具作りも専門的な職業になってきた。

それにともなって神社や寺の周辺の門前町では、信仰の対象となっていた縁起ものが、みやげものに色を塗り替え、子どもの遊び相手のおもちゃとして売られるようになった。信仰が金銭に妥協したともいえるが、一面、子どもの健康や幸福を祈る人間愛が、こうしたおもちゃを商品として成立させたのである。

これはアマチュア玩具からプロ玩具へと変化したことを示している。おもちゃが商品として成長したときにも、この美しい人間愛がこめられている限り、それは他の生活商品と違って、「文化財」と呼ばれる。子どもに注ぐ愛情と言う純粋なアマチュア玩具の本質が、商品の核心に受けつがれ生かされているからである。これは郷土玩具にも、すべて共通した性格である。それが質の高いおもちゃであればあるほど、この愛に満ちた精神が生かされているのを

発見できるはずである、と著している。

おわりに

手づくり玩具は、郷土色濃いおもちゃとして、父親が暮らしの片手間のあり合わせの材料で、子どもの遊び玩具として作って与えたところから発足した。それはふるさとの庶民の生活の中から、いつとはなしに家族が自らの手で作りだしたものであり、子どもたちの遊び相手をつとめる「おもちゃ」であることを意識して作り出されたことである。

つまり、おもちゃは江戸時代に手づくりから商品化されるまでは、すべて家族が自らの手で作り出したものである。

さらに、玩具の発生から考えると厳密な意味の「おもちゃ」とは、手づくりであったと言える。大人が子どもの遊び道具として、子どもに愛情を注ぎ最初から意識して作り与えたものであった。それは、家族のうちだけで、あり合わせの材料で自給自足に作って与え楽しむものであった。子どもに注ぐ愛情と言う純粋なアマチュア玩具の本質であり、そこに人間愛が込められている限り、それは他の生活商品と違って、心のこもった大切な物である。

玩具（おもちゃ）を歴史的に見ると以上のようにまとめられ、その発生にあたっては手づくりであることが玩具の重要な要素であったと言えよう。

上記の研究から明確にされたように、保育者は、玩具（おもちゃ）の出現してきた経緯を大切に、子どもたちが楽しく遊びながら発達できる手づくり玩具（おもちゃ）を、提供して行くことが大切であろう。

引用文献

- 1) 鎌田道隆・安田真紀子 『からくり玩具を作ろう』
河出書房, 2002年 p1
- 2) 同 書 p2
- 3) 同 書 p2
- 4) 同 書 p2
- 5) 同 書 p3
- 6) 齊藤良輔 『日本の郷土玩具』身来社刊, 1962年
p7~10
- 7) 同 書 p11~12
- 8) 同 書 p11~12
- 9) 同 書 p11~12
- 10) 同 書 p11~12
- 11) 同 書 p11~12
- 12) 同 書 p12~14
- 13) 同 書 p14~16
- 14) 同 書 p14~16

- 15) 同 書 p14～16
- 16) 同 書 p14～15
- 17) 高橋たまき・中沢和子・森上史朗 共著 『遊びの
発達学 展開編』培風館, 2002年 p181
- 18) 同 書 p181
- 19) 同 書 p181
- 20) 同 書 p181

参考文献

- 1) 全国社会福祉協議会 「保育所保育指針を読む」
[解説・資料・実践] 全国福祉協議会2008年p167・
p21
- 2) J・ニューソン E・ニューソン 『おもちゃと遊
具の心理学』黎明書房, 1968年
- 3) デューイ 『学校と社会』宮原誠一訳 岩波文庫,
2002年
- 4) 斉藤良輔 『おもちゃと玩具』未来社刊, 1965年
- 5) 須藤敏昭 『おもちゃと遊び、道具と仕事』国民教
育研究所, 1982年

挿入

- 1) 絵図1 鎌田道隆・安田真紀子『からくり玩具を
作ろう』河出書房, 2002年 p2
- 2) 絵図2 同 書 p71
- 3) 絵図3 同 書 p67
- 4) 絵図4 同 書 p67
- 5) 絵図5 同 書 p70
- 6) 絵図6 同 書 p75